

## 金光明最勝王經金字宝塔曼荼羅図の再検討

佐藤 優 (大阪大学)

岩手・中尊寺大長寿院が所蔵する「紺紙著色金光明最勝王經金字宝塔曼荼羅図（以下、本図）」は、奥州藤原氏に関わると目される平安後期の仏教絵画である。本図は『金光明最勝王經』十巻に相当する全十幀からなり、各幀の縦長の画面の中心には、金字による経文で象られた文字塔（以下、宝塔）を配し、その周囲には経典内容を示す絵（以下、経絵）を描き、荘厳な画面を展開する。ただし、本図の制作に関わる同時代史料は一切なく、それゆえ、先行研究では二代基衡時代（-1157年頃）もしくは三代秀衡時代（-1187年）の二説が提唱されてきたが、未だ解決には至っていない。また、経絵の図様解釈や制作工程の実態についてもなお考察の余地が残されている。そこで本発表では、改めて経典との関係を見直すことによって本図の構成を再検討するとともに、技法や表現を精査し、制作工程や制作年代についても私見を述べたい。

まず、『金光明最勝王經』各品の内容を確認したうえで、それと宝塔の周囲を埋める経絵、品題、経文から抜粋した傍題とを対照する。経絵の各場面の解釈については先行研究によって概ね明らかにされているが、本発表ではさらに場面選択の意図についても検討を加える。経典の絵画化にあたっては、先行研究では金光明経系図様を踏まえるとともに浄土教絵画からの図様借用が指摘されてきたが、本発表では新たに、第一・九幀の風神雷神、第三幀の六道諸相などに法華経絵画からの図様借用がみられることを指摘する。また、各場面に散見される傍題の内容を改めて分析したところ、とりわけ現世利益にかかわる語句が選択されている点も合わせて言及する。

次に、本図の制作工程について検討する。本図は縦横に複雑に紙継ぎがあり、ことに宝塔を描く中央部分と周囲の経絵部分では紺紙の色にも差があることが指摘されている。本発表では、さらに画面上部の経題と宝相華文を描く部分の紺紙が宝塔部分と同色であることに注目するとともに、宝塔初層の仏坐像と経絵中の仏像との表現の乖離、画面上部の宝相華文の特色などから、本図が金字経の制作工房と彩絵を主体とする装飾経系の制作工房との合作になる可能性を指摘する。

最後に、本図の制作年代に関して、本図上部の宝相華文に焦点をあて、十二世紀の金字経表紙の宝相華文を中心に様式検討を試みた結果、嘉応二年（1170）に巖島神社に奉納された紺紙金字法華経や、1160年から1170年代後半まで制作された金字一切経（秀衡経）の一部の表紙に近い点を指摘し、三代秀衡時代の制作と位置付ける。その上で、本図が制作された背景を想定すると、傍題内容は総じて私的祈願の側面が強い一方で、図像としては鎮護国家を象徴する四天王像が最も強調されている点も無視できない。総合的に判断したうえで、本図は1170年から1176年の間、鎮守府將軍に着任した三代秀衡に纏わる発願で、公私両方の願意を籠めた制作であったことを指摘したい。